

豊福の歴史

日本書紀(肥後風土記)に見る4世紀頃

※景行天皇の九州巡幸からみる

※景行天皇が実在の人物かははっきりしない。
※その子は日本武尊(ヤマトタケルミコト)であるが、熊襲や蝦夷征伐は有名な神話である。

景行12年(82年)熊襲が背いたので、これを征伐すべく、8月に天皇自ら西下。周防国の娑摩(さば、山口県防府市)で神夏磯媛から賊の情報を得て誅殺した。筑紫(九州)に入り、豊前国京都郡(福岡県行橋市)に行宮(かりみや)を設ける。豊後国の碩田(おおきた)で土蜘蛛を誅して、11月ようやく日向国に入る。熊襲梟帥(くまとける)をその娘に殺させ、翌年夏に熊襲平定を遂げた。日向高屋宮(宮崎県西都市か)に留まること6年。18年(88年)3月に都へ向け出立し、熊泉(熊本県球磨郡)や葦北(同葦北郡)・高来(長崎県諫早市)・阿蘇(熊本県阿蘇郡)・的邑(いくはのむら、福岡県浮羽郡)を巡り、19年(89年)9月に還御した。

景行天皇18年5月、天皇が葦北(あしきた、今の日奈久と思われる)より船出して日暮れになった。その時、遠方に火の光を見つけて着岸した。そこは八代(あがた)の豊村(ほのむら)(宇城市松橋町豊福)であった。火の光の主を問うと、主は不明で、人の火ではなかったので、その国の名を『火の国』と名付けた。(日本書紀)

元自動車試験場を左手に、ミスターマックスから八代方面に向かって少し下ると、国道3号線から右斜め前方に入って行く市道があり、その二股の付け根の高台に景行天皇遺跡がある。下に「史跡心吉(こころよし)」と書かれた案内表示と国道3号側に「景行天皇之御遺趾」の石碑がある。高台に上ってみると、石の祠に天皇皇后像が安置されている。「心吉(こころよし)」と題する案内板には次のようなことが書かれている。

第12代景行天皇の18年5月(今の6月か7月の初め)、熊襲征伐の後、葦北の火流浦(現在の日奈久)より船で出発、火の国(宇土半島基部)へ到らんとされたが、日没となり行先も判らなくなった。遙か前方に日の光が見えたので、その光の方へ船を進ませ、やがて岸に辿り着いた。天皇が「何という邑か」と問われると、里人は「ここは八代(あがた)豊村(ほのむら)である」と、又火のことを問われると「その日の主は知らない」と。ここで天皇は「火の国」とし、又「不知火」と名付けられた。

豊村は豊福村のことで、着岸された所は、西下郷島の江口とされている。

天皇の軍隊は、上陸後東の方に1キロメートル程進んだ頃、短い夏の夜は、はやくも白々と明け始めた。そこを後日「白明隈」又は「白曙隈(しらげのくま)」と呼び、今の小字「白毛熊」である。丁度この頃一陣の風によって北の方から微かな時雨が通過したので、この場所を「微雨」と名づけた。そこから天皇の軍隊は南に移動して大休止となった。この付近一帯は、東側の台地となだらかに連なり、前面は広々とした海である。この時刻太陽が東の山から昇り、さわやかな朝の海風が吹き渡った。天皇は思わず「快し」と申され、後日、この一帯を「心吉」と名づけたとされている。

国道3号線沿いの史跡「心吉」
左は3号線下り、右に行けば園田クリーニンク



史跡「心吉」の説明看板



3号線に向かって立つ石碑「景行天皇御遺趾」

